

戦姫絶唱ガオガイガー

勝機を零しました

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、人類存亡をかけて戦う熱き勇者達の物語である！

シンフォギアを観て、これ実質ガオガイガーじゃね？と考えついたので書いてみました。

初小説でお見苦しいかと思いますが、よろしくおねがいます
批判、提案大歓迎です！

目次

第一話	——	1
第二話	過去	1
第三話	過去 サイボーグ誕生	11
第四話	墓参り	18
第五話	勇者王誕生	22
第六話	原作開始	29
第七話	共鳴	33
主人公設定	用語	37
第八話	会議	43

第一話

俺の名前は天羽剱

俺には前世の記憶がある。

こんなこと誰かに言ったら精神病棟に叩き込まれるのがオチなので誰にも話せていない。

そんな俺は今・・・

「イークイップ！」

サイボーグやっています。

なんでこんな事になったかはさっぱりわからない。

前世の記憶があるといったが、死因すら思い出せない。

覚えているのは、アニメオタクで宇宙飛行士を目指していたことくらい
転生なんて小説の中だけの話だと思っていた。

神様なんて信仰してなかったせいかな神様に会うことすらなかった

そんな俺は

「ウィルナイフ！」

人類の敵というやつと戦っている。

ノイズ

人類を脅かす特異災害の総称。

人間だけを襲い、接触した人間を自身ごと炭素の塊に変えて分解してしまう。

こいつが人類の敵らしい

人間だけを襲うっただけで厄介だが、ノイズが一番厄介なのは普通の攻撃が一切効かない。

拳も拳銃もミサイルもこいつには一切効かない

存在を異なる世界に跨らせる位相差障壁によつてのがあつて普通の物理攻撃が効かない

「ハアアー！」

緑色のナイフでノイズを切り裂く。

そのノイズに数少なく攻撃できるのが位相差障壁を無効化できるシンフォギアと

俺の左腕に装着されている緑色の命の宝石 G ストーンだ。

『一人で前に出すぎだ！ 割！』

ヘルメットにある通信機に風鳴司令の怒鳴り声が響く

「心配するな。俺は地上最強のサイボーグだぜ！」

『そういう問題じゃない！ 奏と翼が来るまで冷静に動け！』

「そんな悠長にしてたらまた犠牲者が増えちまう！ 少しでも数を減らす！」

怒鳴り合いをしながらナイフをノイズに振りかざし、撃破していくが流石に数が多い。

ナイフだけだとジリ貧だなどと考えていると

空から二人の女性が降ってきた

Imyuteus amenohabakiritron:

Croitzaal ronzell Gungnir zizzl:

二人の歌、聖唱が鳴り響く

「あたしらじゃ不満か？」

「私達じゃ力不足か？」

シンフォギアを纏った奏と翼から文句を言われるが

「そうじゃない、これ以上俺みたいな奴を作りたくないんだ！」

前世じゃあこんなに熱い性格じゃなかったはずなのに一々熱くなってしま

もうなくなってしまうた筈の胸の辺りが痛む・・・

「なら三人で守ろうな、弟」

奏が笑顔で喋りかけてくるので

「たった一ヶ月生まれただけが早かっただけで姉貴面するなよ！」

「ノイズはまだ残っている、油断しないで」

「翼は硬いなああ」

話しながらも、三人でノイズを倒していく

『ノイズ反応消失しました、帰投してください。』

司令室からの連絡でやっとな気を緩める

『剋！勝手な行動しやがって後で覚えておけよ！』

「りようかい、そう怒るなよ 師匠」

『誰が怒らせてるんだ！』

「あーあ 旦那怒らせて、後が怖いぞ」と奏が

「司令にあんまり心配をかけさせないであげて」と翼

「わかってるよ、後で組手二、三本組めば機嫌直るだろ。」

こんな非日常的な俺の日常

なぜ、こんな事になったのかは

五年前に遡る。

第二話 過去 1

今世の両親は考古学者だった

聖遺物とかいう過去の異端技術？を発掘したり研究してたらしい

なぜ曖昧なのかと言うと

俺は宇宙飛行士を目指せると喜び、それだけに夢中だった。

父親ににその事を話すと

「好きにしなさい 後を継げとは言わん」

とあっさり認めてくれた。

母親に至っては

「剋が初めて言ったわがままだもの 私も応援するわ」

と認めてくれた

その言葉を聞いたとき、俺は泣いてしまった。

それからは新しい両親というのが受け入れがたく、他人のようにギクシャクしてしまっていた関係が嘘のように優しく接してくれた。

しかしそんな幸せな時間は長く続かなかった。

五年前

俺は両親に連れられ、長野県の皆神山に車で向かっていた。

「剷！ つくまで暇だしトランプでもしようぜ！」

「仕方ないな」

両親の所属している聖遺物捜索チームの天羽夫妻の娘

天羽奏に話しかけられ本を畳んだ。

「また剷はそんな難しい本を読んでるのか」

「将来の夢のためだからな ババ抜きでいいか？」

「剷お兄ちゃん 私も混ぜて！」

奏の妹も混ざり、着くまでトランプをしていた。

奏とは両親が仲が良く、こういった捜索作業の時に会い遊ぶようになった。

皆神山

調べても戦時中に防空壕が作られた山だったかなんかとか出てこない

それだけなら今回もお宝は見つからないなど考えていたが、いざ遺跡に入って見るとその考えは甘かったと考えさせられた。

明らかに防空壕とは思えない入り組んだ道、ナゾの雰囲気
男なら興味が湧いてしまうにきまっている。

「父さん、母さん！ 早く進もう！」

珍しく年相応の反応をしていると両親は笑いながら

「楽しいのはわかるが走るとコケるぞ」と言ってきたがすでに俺は何かにつまずいてコケていた。

「コケてやがんの だっせえ」と奏がバカにできて、いつもなら言い返しているが俺は足元にあった六角形の緑色に輝く石に夢中になっていた。

何か見覚えある物だが生まれ変わって12年、前世の記憶など遠に薄れていた。

「父さん父さん！ これお宝なんじゃない？」

「ほう… 帰ってみて調べてみるか これがもし聖遺物なら大手柄だぞ割」といって撫でてくれた。

楽しいひと時は長く続かなかった

後ろから悲鳴が聞こえる。

振り返ってみると灰色の怪物がチームの人達を襲っていた

ノイズ

あらゆる攻撃も効かず、人間を炭素に変える化物

実際には見たことがなかったからどこか他人事だった俺はさつきまで笑っていた。たちが死んでいくのを見て動けないでいた。

それに気づいた父さんは俺を抱え、母さん、天羽家族とともに遺跡の奥へ走って逃げた。

逃げ切れないと悟ったのか父さんは俺を下ろし、

「俺が囿になるからお前たちは逃げろ」と言い放った。

「そんなの嫌だ！ 一緒に逃げよう！」

「お前には夢があるんだろ 母さんと天羽さん達と逃げるんだ」

だが話していてもノイズは待ってくれなかった。

父さんは目の前で灰になった

続いて近くにいた母さんもいなくなった

動けなかった俺のせいで

天羽さん達がなにか言ってるが耳に入らない

「おい剋！ 早く逃げよう！」

奏が話しかけてきてようやく現実に戻れたが

奏の後ろにノイズが見えた瞬間体が動いていた

奏を押し飛ばし、天羽さん達の方へ逃がす。

ノイズに足を炭素に変えられる
不思議と痛みは感じなかった。

「剋！」

奏が泣きそうな顔で近付こうとしてくるが手で制し、天羽さんに
「奏を連れて逃げてくださいー」と伝えると

悲しい顔をしながらも奏を抱えて奥に行ってくれた。

ノイズがまた近づいてくる

死なばもろともだと左腕で殴りつけた。

その時左手に握っていた石が光り輝いた。

それからの記憶は無い

目がさめた時は4年経っていた

第三話 過去 サイボーグ誕生

歌が聞こえる

何かに腕を引つ張られる感触とともに目を覚ました。

ぼやけていた視界

眼がまるでカメラのようにピントを合わせてくれた

「剝！」

手術室のようなライトが周りを照らしているが眩しさを感じない

体の感覚がおかしい

まるで自分の体では無いようだ

「おい剝！」

首だけを持ち上げ、周りを見つめる

見たこともない機械、管が機械の体に刺さっている

「無視すんな剝！」

頭を殴られ、現実に戻る

青色の少女と見覚えのある朱色の少女が立っていた

「もしかして奏か？」

起き上がりながら覚えている姿と違う少女に話しかける

「剷… 起きてくれてよかった…」

急に泣き付かれ困惑していると、青色のアーマーをつけた少女が話しかけてきた
「櫻井女史を呼んできます」

しばらくするとメガネを掛けた女性と筋骨隆々の男性が入ってきた

「始めまして 俺は特異対策機動部二課の司令 風鳴弦十郎だ。」

「そしてそして私は出来る女と評判の櫻井了子 よろしくね。」

「はあ… よ、よろしくおねがいます」

あまりにも急な展開についていけないが、とりあえず返事だけはでた

「いろいろ疑問もあるだろうが、了子君」

「大丈夫よ バイタルは全部正常値 これが天つ才の力よ！」

…なんだろうあの女性からはマッドの香りがする

ため息をついた風鳴さんが話す

「獅堂剷君 記憶ははつきりしているか？」

「…はい 俺の両親は？」

「すまない…」

わかっていた事だが現実だと思おうと悲しくなるが涙が出ないことに疑問をもった

「だが 君の両親と君が身を挺したおかげで奏の両親は無事だ」

「ありがとう 剋……」

だがその言葉に少し救われた

「いきなりの質問なんですがこの体は？」

「それについては私が答えるわ！」

テンションMAXな櫻井さんが話してきた

暗くなったこの空気を和らげるためだと思おう…… 思いたい

「とりあえず立ち上がってもらえるかしら？」

硬いベッドから飛び起きるように立ち上がるうとすると

まるで自分の体では無いようにふらついてしまった

「大丈夫か!？」

風鳴さんが肩を抱え、持ち上げてくれた

「目覚めたばかりなんだから無理しないの！ そのままでいいから聞いて」

「左腕を見て頂戴」

俺の左腕にはあのとき遺跡で見つけた 緑の石が輝いていた

「その石があなたの命を繋ぎ止めていたのよ。だけどそれにも限界があった」

「だから私とその体を作ったのよ！」

「その石完全聖遺物なのは確かなんだけど名前がわからないのよ」

いきなりのマシンガントークに困惑しながらも俺は石について考えていた

緑の石、サイボーグ

・・・あれ これってGストーンじゃね？

前世で大好きだったアニメに出ていた物を思い出していると口に出していたらしい

「Gストーン？」

周りに聞こえてたらしく、櫻井さんが聞いてきた

前世の記憶でなんて言えないので必死にごまかす

「意識を向けてみたらそう聞こえたんです」

櫻井さんは考えるような仕草をし

・・・他にも何か聞こえないかしら？と言ってきた

もう一回意識を向けてみる

声が聞こえた

「イクイップ」

そう呟くとGストーンが光り輝いた

頭部にヘルメット、肩にアーマー、右腕のGストーンの周りには獅子をかたどった装

飾

完全にサイボーグ・ガイである

「聖詠も無しにシンフォギアを纏った!? これが完全聖遺物との融合!?」

櫻井さんが驚愕しているが知らない単語がいくつか出てきたので訪ねてみる

シンフォギア

正式名称 F G 式回天特機装束

・ 櫻井了子の提唱する「櫻井理論」に基づき、聖遺物から作られた

・ 現在、認定特異災害ノイズに対抗しうる唯一の装備である

・ 身に纏う者の戦意に共振・共鳴し、旋律を奏でる機構が内蔵されているのが最大の

特徴。その旋律に合わせて装者が歌唱することにより、シンフォギアはバトルポテン

シャルを相乗発揮していく

まるで意味がわからんがとりあえず

「ノイズに対抗できて、歌と感情によって強くなるって事でいいですか?」

「だいたいあってるわよ 理解が早くて助かるわ」

「だけど私の作ったシンフォギアは起動には聖詠というコマンドワードが必要な」

「二人の聖詠のおかげであなとも4年間の昏睡から目覚めたのよ」

え 4年間?

驚愕の表情浮かべ、奏の方を見るが眼を赤く晴らしながら頷いた

咳払いをしながら、風鳴さんが話しかけてきた

「これからだが、君はどうしたい？」

「シンフォギアは憲法に抵触しかねないため完全秘匿状態だ」

「今キミは死亡扱いになっている　もちろん君が普通の生活をしたのなら戸籍を用意し、生活を支援しよう」

そんなの決まってる

「俺に戦える力があるなら戦います」

「それは敵を取るためか？」

「それもありますが、俺のような人をこれ以上生みたくありません！それに奏も戦っている！だから戦います」

風鳴さんはため息を吐いた

「なら特異災害対策機動部二課は君を歓迎しよう！」

「よろしくお願ひします！」

それから地獄の特訓は始まった

いくら体がサイボーグでも脳は人間だ、最初は体に全くついていかなかった

やっと体がついてきたと思ったら司令との訓練が始まった

「これが発勁だー」

8t 近くある俺のパンチの威力を地面に逃がす

時速60キロの動きについてくる

単純なパワーならまだしも技術じゃ全く追いつけない

・・・・流石にパワーは勝ってるよね？

体を鍛えながら、奏や風鳴翼（司令の姪らしい）と交流を深めた

二人はツヴァイウィングというボーカルユニットをやっているらしい

音楽に疎い俺だが二人の歌は胸に響いた

半年後には大きい公演もあるらしい

楽しみだ

その公演を境に俺の物語は加速していく

第四話 墓参り

地獄の特訓を初めて半年後

「師匠、今度の土日は特訓休んでいいですか？」

なぜか特訓と称して一緒にアクション映画見ている風鳴司令に話しかける

「何かあるのか？」

「心の準備ができたのでそろそろ墓参りに行こうと考えてまして、後家の私物も取りに行かないと……」

「そうか…… もちろん許可しよう」

司令はそう言いながら立ち上がると

「よし！ 今日はおと一本で終わりだ！」

……ハイパーモードにもついてくるこの人は人間なのか疑問に思う

研究室

「はい！ 今日のメディカルチェックは終わり。今回も異常なし」

「ありがとうございます。今日は折り入って相談があるのですが……」

いつものメンテナンスが終わり、了子さんに話しかけた

「やだ 告白?」

「ふざけないでください 今度の土日、墓参りに行こうと思っただけですが この体どう隠すか迷ってます」

そうねえ・・・と考える仕草をし

「よし、お姉さんに任せなさい!」

お姉さん?と疑問に思つとも口には出さないがバレたらしい

「覚悟しておきなさいよ」

俺は相談相手を間違えた事を心から後悔した

食堂

俺はいつもの牛丼を頼み、席を探していた

「おい 割こつち開いてるぞー!」

奏に案内されついた席には風鳴翼もいた

翼ちゃんには睨まれるが気にしない

俺はなぜが彼女に嫌われてるらしいが命の恩人なので訓練で殺意を感じても気にしない

ありがたいという席に着く

「罰はまた旦那と特訓か？　あまり無理すんなよ」

彼女が心配してくれているが、俺は

「俺がこの体になったのは誰かを守るためだ　奏や翼ちゃんが戦ってるなら、俺も戦う」

「そうか　あまり無理しないでくれよ・・・　もし何かあったら」

「わかつてるよ　それより今度の土日暇か？　一緒に行つてほしいところがあるんだ」

聞いた瞬間奏の顔が真っ赤になるが熱でもあるのかと考える

「そそそれって・・・　どこに行く予定なんだ？」

「父さんと母さんの墓参りだよ　もう逃げないようにしたんだ　奏にも来てほしい」

「わかった　あの人達もあたしの命の恩人だしな」

「私も行きま「だめですよ」す」

会話の途中に緒川慎次さんが混ざってきた

「心配も出さずにいきなり現れないでくださいよ・・・」

緒川慎次

特異災害対策機動部二課に所属するエージェント

江戸時代から続く忍者の末裔らしいが忍術といい影縫いとかかいう意味不明な技を使う辺り下手すると風鳴司令よりおかしい

「翼さんは仕事が入っています　後二人にしてあげましょうよ」

翼ちゃんはぐぬぬといいそうな顔をしているが諦めたらしい

緒川さんに小声で話しかける

「なんで俺翼ちゃんに嫌われてるんですか？」

緒川さんが苦笑しながら

「多分嫉妬してるんですよ 奏さんを取られるかもって」

「はあ・・・」

女の子の心はわからない

第五話 勇者王誕生

剽は奏との待ち合わせの為に駅前に来ていたが・・・

ナニアレ

シツジ？

ホンモノ？

好奇の目に晒されていた

「了子さんに任せたのは間違いだった・・・」

彼の今の姿は執事服である

今朝、手袋に懐中時計まで完備のフルセットを渡された

体がサイボーグな為、全身を隠すため仕方ないことだが流石にこれでは違う意味で目

立ってしまう

視線に耐えきれなくなった剽は、音楽プレイヤーを出し外界を遮断することにした

聞く曲はツヴァイウイングの曲 逆光のフリューゲル

音楽には疎い俺だがこの曲は好きだ

俺を目覚めさせてくれた奏と翼ちゃんの曲だから、というのもあるが

「剽！ 遅れてごめん！」

どうやらやっとな来てくれたらしい

「遅いぞ 奏」

サングラスを掛けた奏がやっとな到着

「そこはいま来た所だろ！ 何聞いてるんだ？」

「この状態じゃそんな余裕無いぜ・・・ ほれ」

俺は顎で視線の先を指しイヤホンの片方を渡す

「まあその服装じゃあなあ・・・ これアタシ達の曲じゃねえか！」

「いい曲じゃん 次のライブ楽しみにしてるぜ」

奏が顔を真赤にしてるのをいいことにいじってやる これは決して八つ当たりではない
ない

「そういえばなんで遅れ「ゴホン！」tn・・・なんで翼ちゃんが居るの？」

「奏に不埒なことをしないかの見張りです！」

まさかと思い、携帯を確認すると緒川さんからメールが来ていた

「すみません どうしてもと言われ、許可してしまいました」

「司令はなんと？」

『『最近仕事詰めだったから丁度いい しつかりエスコートしろよ剽！』だそうです・・・』

『了解です 緒川さんもゆつくり休んでください』

緒川さんも大変だなあ

「とりあえず行くか」

「その前になにか言うことは無いのか？」

若干不機嫌になった奏が言ってくる

今の奏の服装は赤色のワンピースにサングラス

翼ちゃんは白い帽子に青い服

二人共サングラスを掛けていても美人なのがわかる雰囲気醸し出している

「二人共似合ってるよ 雰囲気ピッタシだ」

俺の答えはあっていたらしく二人共恥ずかしがっていた

仕返しのももりか奏はいやらしい笑みを浮かべながら

「剋も似合ってるぞ」

と抜かしやがったので

「では、お手を拝借してもよろしいですか？ レディ」

笑みを浮かべながら手を差し出すと恥ずかしかったのか切れて殴られた

ざまあ

いつまでもここに居るわけにも行かないので花屋に寄り、仏花を買い両親の墓に向

かった

華を添え、手を合わせる

・・・・俺を助けてくれてありがとう 俺はいろいろあつたけど生きてるよ

この体で人を助けるように頑張るから見守ってくれ

「さーてこの後家に家に行く予定だけど来るか?」

この後の事を考えていると、二課用の端末が鳴り響く

『ノイズが現れた! 奏と翼は至急向かってくれ!』

『了解!』

『司令 俺も行きます!』

『くれぐれも無理はするなよ』

『了解!』

幸い現場はすぐ近くだったので早めに付けたがすでに炭化されたものが一面に転がっていた

糞が、つぶやきながら戦闘を開始する

「イークイップ!」

「Croitzalronzell Gungnir zizzl」

「Imyuteus ameno habakiriron」

二人もシンフォギアを纏いノイズに向かつていく
ウイルナイフを取り出し、小型ノイズを切り裂く
しかし数が多い

「クッ!？」

人型ノイズの腕にナイフを弾かれ、隙きを晒してしまう

反撃を受けそうになったとき、刀が降り注ぎノイズを駆逐していく
翼ちゃんに助けられ、礼を言おうとすると

「アームドギアも出せない覚悟の無いものが戦場に立つなッ!」

と怒鳴られてしまった

アームドギア

シンフォギアシステムの主兵装。

それ自体に可動・可変ギミックを有し、行使する技や使用方法に応じて特性や形態を
変化させ、絶唱時にはこれを介する為の媒介としても機能する。

装者の心象もその形成に大きく影響を与えるらしく、俺はまだ出せていない

・・・俺に戦う覚悟がないと言うことか・・・

俺の戦う理由・・・そんなの一つしか無い!

「俺のような奴も生み出さない G ストーン！ 俺に力をよこせ！」

突如左腕の G ストーンが光り輝く

声が聞こえる

その声に従い俺は叫ぶ

「ファイナル・フュージョン！」

G ストーンか3つのエネルギー体が飛び出し俺と合体する

ガオツ！ガイツ！ガー

肩には新幹線、膝にはドリル、背中にはステルス戦闘機、そして胸にはなぜかライオン 二人と司令部は困惑していた

多数の小型ノイズが体を紐状にしてきた

左腕を突き出し叫ぶ

「プロテクト・シールド！」

左腕から空間湾曲してバリア展開し、そのままお返しする

「まだまだア！」

右腕を上挙げて右下腕部と拳を高速で個別に逆回転させ射出させる

「ブロウクン・マグナム！」

弧を描くように発射された拳は残りのノイズを片付けた

司令部よりノイズ殲滅完了の報を受け取り奏と合流すると気が抜けたのかとアームドギアが解けてしまった

「剋なんだよあれ！ かつけえじゃん！」

「多分俺のアームドギア だと思う」

「翼ちゃん、アームドギアも出せたしこれで少しは認めてくれるか？」

「はい・・・ いままで意地はつていてをすみませんでした・・・」

しゅんとしている翼ちゃんを見ていると奏が

「翼は可愛いなあ」と言いながらじゃれ合っていた

うん俺もそう思う これがギャップ萌えってやつか

第六話 原作開始

今日は表向きにはツヴァイウィングのライブに来ていた

そう表向きはライブだが、

裏側二課の指揮で完全聖遺物「ネフシユタンの鎧」の起動実験が行われる

奏と翼ちゃん、そして観客のフォニックゲインを利用して起動させるらしい

一般人を巻き込むには納得がいかないが、一隊員が何を言っても無駄なのはわかってる

だから対策をとる

緒川さんに手回ししてスタッフに諜報部を回してもらい、いざという時の避難経路の把握

「なあ師匠 やっぱりライブを使うのはまずいんじゃないんですか？」

「お前の言った通り人員は回した 後は俺でもどうにもできん」

スタッフ用通路を通りながら文句を言う、師匠は最近ピリピリしている

この実験のこともあるが最近帰国予定だった適合者候補生が帰国直後に行方不明になったらしい

その憤りを特訓に当てるのはやめてほしい

奏と翼ちゃんに合流し、師匠と俺が激励を飛ばす

「剋も楽しんでくれよな！」

「ああ 特等席で見させてもらおうよ」

『こつちも準備終わったわよ〜』

了子さんからの通信を受け、緒川さんを通じて諜報部に指示を送る

なんで俺が隊長みたいなことやってんだ・・・

「俺たちができるのはここまでだ」

「後は何も起こらないのを祈るだけですな」

師匠は研究室に向かい俺は一番見渡せる最上部席に着く

照明が暗くなり、ライブが始まる

逆光のフリーユーゲル

こんな実験が行われてなきやプラチナチケット取ってサイリウム振り回してるんだ
けどなあ・・・

実験内容が無線機から聞こえてくる

エラー音らしきものが鳴り響いていて、音声聞き取りづらい

マズイ 何かが起きてしまったらしい

直後爆炎が上がり、ノイズが現れた

思っていたことより最悪な事態が起きてしまい動揺するがすぐに冷静を取り戻し
ステージに飛び降り、奏と翼ちゃんに合流する

「すでに被害者が出ている！ 行くぞ奏 翼ちゃん！」

「おう！」

「ま、まだ司令からは何も・・・」

「そんな事言ってる場合じゃない！」

「ファイナル・フュージョン！」

「Croitzal ronzell Gungnir zizzl…」

奏はガングニール、俺はガオガイガーを身にまといノイズに向かってく

STARДУST∞FOTON

「ブロウクンマグナム！」

槍の雨と高速回転する拳でノイズを蹂躪していく

「Imyuteus amenohabakirritron…」

一拍遅れ、翼ちゃんも天羽々斬を纏いノイズを切り刻む

LAST∞METEOR

奏が槍の穂先から生み出した竜巻でノイズの塊をふき飛ばす
負けてられない

膝のドリルで大型ノイズに風穴を開ける

戦いは苛烈を極めた

第七話 共鳴

「プロウクンマグナム！」

何回目かわからないほど高速回転させた腕を飛ばしノイズを倒していく

ついに限界来たのか、右腕が砕け散る

「まだまだア！」

自分を奮起するかの如く、声を上げドリルを叩き込む

直後後ろで小さな悲鳴と何かが砕ける音が聞こえた

そちらに向かうとシンフォギアが砕けた奏と胸から血を流した少女がいた

「おい奏！ 大丈夫か！」

「アタシは大丈夫だ！ それよりこの娘が！」

瓦礫に寄りかかっている少女は胸に破片が刺さったのか、多量に出血していた

うつろながらも意識はあり、即命にかかわるわけでもなさそうだがノイズは待つてく

れない

奏は俺の手を握り立ち上がるが、これ以上戦闘は無理そうだ

「奏、俺は今から賭けに出る」

「アタシは剋を信じる」

「隣で歌ってくれ もちろん普通の曲を」

絶唱なんて使わせない

「ああわかった！ 特等席で聞かせてやる！」

逆光のリゾルヴ

ああやっぱり奏の歌は最高だ

直後Gストーンが光り輝き、右腕が再生した

それだけじゃ無い 奏のガングニールが共鳴し、力が流れ込んでくる

俺はすべてのエネルギーを両腕に込め、叫ぶ

「ヘル・アンド・ヘブン!!!」

攻撃のエネルギーと防御のエネルギーを開放し、呪文を唱える

「ゲム²・ギル^つ・ガン^カ・ゴー^を・グフオ^に…」

両手を合わせて融合させる

体が緑色に輝き、竜巻が背中から流れ出てノイズ達を拘束していく

「うおおおおお！」

背中のスラスターを最大出力にし突撃する、攻撃の余波だけで小型ノイズは炭素に変

わる

そのまま大型ノイズに両拳を叩き込み、中身を引きずり出す
「ふんッ!!」

大型ノイズが吹き飛び火柱が上がる

周りのノイズもすべて吹き飛んだ

翼ちゃんの方の方を見るがあちらも終わったらしい

流石に限界が来たのかアームドギアが解けてしまった

奏が近づきながら、話しかけてくるが聞こえない

視界が傾く

どうやら限界らしい

いつもの硬いベッドで眼がさめた

違和感を感じた左腕を見てみると泣いている奏が掴んでいた

また倒れたらしい

起きたのに気づいた了子さんが司令を連れて入ってきた

「司令、今回の犠牲者の人数は？」

「開口一番にそれか もっと自分を大事にしろ！」

司令がため息を吐きながら

「そうだと割！ 本心に心配したんだからな」

涙目の奏

二人に怒られ、謝るしかなかった

俺は2日ほど眠っていたらしい

今回の事件で死者、行方不明者は約5000人 あんだけ事前に対策を取ったのに

ノイズ以外での死因も少なくないらしい

起動実験をしていたネフシユタンの鎧は行方不明

自分の不甲斐なさに拳を握りしめるが、司令が

「お前だけが背負い込むんじゃない これは俺たちの責任だ」

「そうよー これだけの事故が起きて、被害が少なかったのはあなた達のおかげよ」

了子さんが一拍おいて

「それより 奏ちゃんに何かした？ 適合率が上がってるんだけど？」

俺は起きたことを正直に話したが、

了子さんは

「聖遺物の共鳴？ ギアの再生？ 作った私すらわからない事ばかりじゃないの！」

櫻井理論を土足で踏みにしり、喧嘩を売った男と怒鳴られた

主人公設定 用語

天羽剱（旧姓 獅堂）

前世があつたけどほとんど覚えてない系主人公

皆神山でGストーンを発見、その後奏たちを守り体のほとんどを炭化されるが

櫻井了子の手でサイボーグ・ガイとして生まれ変わる

櫻井了子自身は研究のためにあくまで生命を維持するための最低限の機械化だった
が

剱自身がGストーン、サイボーグという単語で自分がガオガイガーという作品を思い
出し、

ノイズと戦うという選択肢を選んだ

イークイツプやアームドギアは完全に想定外

原作のガイほどサイボーグ化に割り切れていないため、本人が勇者や地上最強のサイ
ボーグと自称する時は弱気になっているのを誤魔化しているときである

（読む価値のない作者の一言）

原作ガイに憧れ、大分コンプレックスになつてる

勇者にならなければいけない、人を助けなければいけないと考えている

原作ガイがサイボーグの体に悩んでる描写が殆ど無い（一応ドラマCDか小説であった）が流石に元一般人じゃ無いと考えると設定が今ついた

【イークイップ】

金色の角、肩や足にアーマー【アルティメット・アーマー】、右目にセンサー左腕のGストーンの周りに獅子の装甲がついた状態

（調べても詳しいスペックが出てこなかった為、原作の描写から見る限り

パンチ力500kgオーバー

速度 300 km/hくらい)

原動機関 胸部マシンハート

髪の毛も燃料電池・エネルギーアキュメーターに代えられている

武装

ウイル・ナイフ

緑色の短剣

剽の意思により切れ味が変動する

【ガオガイガー】

剽の強くなりたい、ノイズから人々を守りたいという気持ちにGストーンが与えた力見た目はクロスフレイム・ガール ガオガイガーの男版、マスク有りを思い浮かべて貰えれば

サイズはほぼ人間サイズ

武装

ドリルニー

名前そのままドリルついた膝での蹴り

ブロウクン・マグナム

高速回転した右腕を撃ち出す、所謂ロケットパンチ

プロテクトシールド

左腕から展開する空間湾曲バリア ある程度の攻撃なら反射できる

ヘル・アンド・ヘブン

ゲーム・ギル・ガン・ゴー・グフォ（2つの力を1つに）の呪文とともに右手の攻撃エネルギー、左手の防御エネルギーを両手を合わせて融合、竜巻で相手を拘束し突撃、組

んだままの両手で撃ち抜く

この技は呪文が未完成であり剷にとつともない負担がかかる（剷自身も気づいていて完成した呪文も知っているが唱えても今のままでは意味がない）

Gストーン

剷の命を繋ぎ止めている六角形の聖遺物

謎の多い完全聖遺物と考えられているが、本質は○○○○に近い

聖遺物の第一人者、櫻井了子を持ってしても完全な解明はできていない

勇気（もがきあがき、生きようとする）に反応剷に作者にも未知の力を与える

こつからはガオガイガー知らない人用

Gストーン

原作（勇者王ガオガイガー）では三重連太陽系という別次元の宇宙の緑の星からもたらされた命の宝石

原石はGクリスタル 元はあるプログラムに対する安全装置だった
同じ三重連太陽系にある紫の星のストレスを無くす機械のマスタープログラムが暴走

Zマスターとなり紫の星を機界昇華、同じく三重連太陽系の赤の星と緑の星にも侵食してきたため緑の星の指導者 カインは自分の息子（ラテイオ）にZマスターに対する抗体を発見、それをもとにGクリスタルをGストーンに改造、ギャレオンも改造したが間に合わず青の星（地球）にギャレオンとラテイオを逃がすところから物語が始まる
ぶちやつけると割となんでもアリな動力源

リンクしたり、分割しても結晶構造を維持できる

最大出力を出すためには勇気が必要だが、宇宙船の動力源に使われたりと多種多様な作者の説明がよくわからなかったら勇者王ガオガイガーを見ましよう！

なぜか「成功確率は単なる目安だ 後は勇気で補えばいい！」がひとり歩きしてます
が

あれはあらゆる計算、準備をしてもうなんにもできないことがない時に使われたもので
す

ガオガイガーは他にも民間人の被害対策等でいろいろ考えられている作品なので超
面白いです

BRBOXが発売されているので買いましょう！

第八話 会議

表向きはツヴァイウィングのライブ、秘密裏に行われていたネフシユタンの鎧起動実験の失敗から一週間後

私立リディアン音楽院の地下に隠されている、特異災害対策機動部二課

その一室 盗聴対策完備の特別会議室には司令と上層部、諜報部、俺を含めて30人ほど集まっていた。

「これよりネフシユタンの鎧起動実験失敗及びにノイズ被害に対する緊急会議をおこなう」

「その前に犠牲となった5436人の人命に対し黙祷！」

珍しくネクタイをキツチリ締めている司令の言葉に皆一分ほどの黙祷を捧げる

「まず、ネフシユタンの鎧の行方についてだが・・・」

「そこからは私が」

諜報部の実質的隊長緒川 慎次が立ち上がり、話を続けた

「事件後、諜報部で24時間体制で捜査に当たっていますが依然として不明です」

「そうか・・・引き続き捜査を頼む」

「了解です」

「続いて被害者とその遺族に対してだが、国から補償金が支払われることになった」

「それについてですが司令、問題点が」

俺は司令に対し、進言する

「何だ、話してみろ」

その言葉を受け取り、立ち上がる

「今回の犠牲者の5436人の内1／3ほどががノイズによる被害ではなく、将棋倒しによる圧死や避難路の確保を争った末の暴行による傷害致死なのはご存知の通りだと思っております…」

「ですが？」

「それに対して生存者に対しての世論からのバッシングが懸念されます。その予兆も

出ています」

「それは本当か!？」

司令は信じられないとの口調で尋ねてくる

「はい、すでにマスコミではエセ評論家等が生存者を非難しており、ネットでは生存者を特定しようとするような輩まで出てる始末です。」

「ううむ」

「すでに諜報部は一課と連携を取り事態の収束を図っていますが完全には行かないようです」

「了解した 俺からも国に掛け合つて対策を取つてもらおう」

「ありがとうございます」

こんな時に人間同士で争つてほしくない、凱はその願いで一心不乱に動いていた

「後、怪我が治癒した後ツヴァイウィングによる記者会見等や慰安ライブも考えていますか……」

「そのあたりは本人たちとマネージャーのお前ら二人に任せる」

「了解しました」

何故か俺もマネージャーになつてしまつた

ライブの前に奏が買ひ物に行きたいと言ひ出し、その護衛に付いた時チンピラがあまりにもしつこいナンパをしてきたため、ちよつとキツめのお灸を据えたらマスゴミに『天羽奏に彼氏!』とすつぱ抜かれ、緒川さんの負担軽減のためにもマネージャーをやる羽目になつてしまつた

緒川さんがこれ以上仕事を増やさないでくれとこちらを見て苦笑いしてくるので頭を下げる

それからしばらく話し合った後会議は終了した。

「みんな、苦労 交代制なるが少し休暇を用意している。」
その言葉に喜びの声が上がる。

皆が解散した後も、残り仕事を続ける

これ以上悲しむ人を増やしたくない

俺がサイボーグになったのはそのためだと考えている